

# 五月の風景

激動の時代を生きつづけて

匠探訪

— 37 —



図書館に本を寄贈した椿もとさん

岩本紀子さんが内山新田（豊和地区）の椿さんを訪ね、数年かけてインタビュー取材し、まとめたものです。その中の「八日市場の農事暦」5月を見ると、田植えの作業衣について、その昔は、「田植襦袢（じゅばん）、田植股引

「60歳からの生きがい探し」では、公民館講座で習字や民謡を習ったこと、67歳での運転免許取得なども描かれています。

岩本さんはあとがきで、「私が、椿もとさんの話に魅入られたのは、「嫁のけつたたき」と「どじょうたたき」の話があまりにも面白かったからである。」と述べています。市内にはこうした体験や話を知っている人もまだまだ多いでしょう。しかし、急速に変化する生活の中で忘れ去られようとしている今、「一農村の女性の生活史」がまとめられたことで、後世に伝えられることでしょう。

（ももひき）、田植前掛（まえかけ）」があり、男は無地、女は若い人ほど緋（かすり）の柄が大きかったと語っています。

「それにしても、あの頃はよく裸足で田へ入り、仕事が出来たものと思う。」と語り、やがて田植足袋（たび）からゴム足袋に変わったそうです。「当時の気候は6月に田植え、10月に稲刈りが普通だった。それが今は4月に田植え、8月に稲刈りが当たり前になっている。農作業は2か月も早

田植えがすんであたりが新緑につつまれ、すがすがしさを感ずる季節となりました。

「本書は、八日市場（現匝瑳市）の農家の女性、大正7年（1918）生まれの椿もとの語り、生活史として受け止め、録音し、出来る限り忠実に記録し、編集したものである。」と、冒頭に書かれた『八日市場の土に生きる―聞き書き 椿もとの生活史―』という本がこの春、市立図書館に寄贈されました。この本は、八千代市在住の